

2013年度の調査結果にみるマルチメディアDAISY図書利用の現状と課題

専修大学文学部
准教授 野口 武悟

はじめに

公益財団法人伊藤忠記念財団（以下、伊藤忠記念財団）では、2011年度より、マルチメディアDAISY図書「わいわい文庫」の製作と寄贈を行っています。寄贈先は、全国の特別支援教育を行っている学校（特別支援学校や、特別支援学級を設置する小・中学校など）、障害者サービスを行っている公立図書館などです。

これまでに寄贈した「わいわい文庫」の利用状況と利用者の意見を把握し、よりニーズに応じた作品製作につなげることを目的に、伊藤忠記念財団では、昨年度に引き続き、2013年度も二つの調査を実施しました。

一つは、全国で唯一、すべての特別支援学校（12校）が寄贈を受けている島根県を対象に実施したアンケート調査、もう一つは、大阪市立中央図書館などで実施した利用者モニタリング調査です。回答のあった利用者モニターは21人でした。

この二つの調査の結果（88～98ページをご覧ください）をもとに、昨

年度の調査の結果とも適宜比較しながら、マルチメディアDAISY図書利用の現状と課題を整理したいと思います。

アンケート調査の結果から

まず、島根県の特別支援学校を対象としたアンケート調査の結果からは、特別支援学校における利用の現状と課題を次の四点に整理できます。

- (1) マルチメディアDAISY図書を「知らなかった」と回答した学校は12校のうち9校でした。昨年度の調査では12校のうち5校でしたので、「知らなかった」と回答した学校が増えています。ここには、担当者の交代などが関係しているものと思われます。
- (2) マルチメディアDAISY図書が在籍児童生徒の読書に「役立つ」「少し役立つ」と好意的に捉えている学校は12校のうち11校で、昨年度よりも1校増えました。実際の利用場面のうち「授業」での利用は、昨年度同様、半数以下の学校にとどまっています。「授業」での利用を促すた

めには、「国語の教科書の内容があるとよい」「楽器の図鑑のようなもの(がほしい)」などの教職員の意見をふまえた作品製作をさらに進める必要があるでしょう。一方、「利用していない」と回答した学校は昨年度の4校から2校に減少しています。

(3) マルチメディアDAISY図書の保管場所は、学校図書館が12校のうち9校でした。昨年度よりも2校増えています。一方で、担当者個人で保管している学校も昨年度より減少したとはいえ3校あります。担当者が個人で保管するのではなく、学校図書館の所蔵資料として位置づけて、学校全体で利用できる体制を整える必要があります。

(4) 今年度から「わいわい文庫」採録作品の原本の表紙を一覧にしたポスターを「わいわい文庫」のCDと一緒に寄贈しています。しかし、「活用している」と回答した学校は3校にとどまりました。この3校では、「児童生徒が作品を選ぶときに、絵(表紙)を見て選ぶことができよ」「どんな作品があるか、視覚的にわかりやすく見ることができてよ」「など、ポスターを有効に利用している様子がかがわれます。しかし、残りの9校では、「適した掲示

場所がない」「添付してあったことを忘れていた」など利用には至っていないようです。ポスターの活用法についても本冊子や伊藤忠記念財団のウェブサイトで紹介していく必要があるでしょう。

モニタリング調査の結果から

次に、利用者モニタリング調査の結果からは、個人利用の現状と課題を次の三点に整理できます。

(1) マルチメディアDAISY図書を週1回以上利用しているモニターは21人のうち9人(42.9%)でした。昨年度は、18人のうち6人(33.3%)でしたので、増えています。その一方で、「ほぼ利用していない」と回答したモニターが5人(23.8%)いました。こちらにも、昨年度の2人(11.1%)から増えています。利用していない理由は、「新しい環境の中でバタバタしてしまい、なかなか利用できていない状況」「6年生で忙しい。なかなか時間がとれず残念」などモニター側の生活環境に関するものと、「最初は利用していたが、あきたようだ」「興味のある本を全て読んでしまった」など「わいわい文庫」採録作品に関するものとに大別できます。後者の解決には、ニーズにあっ

た作品をさらに増やしていく必要があるでしょう。

(2) マルチメディアDAISY図書を利用するようになって読書時間や読書への意欲が「向上している」と回答したモニターは21人のうち10人(47.6%)で、昨年度の18人のうち8人(44.4%)と大きな差はありませんでした。一方、「変化は感じない」というモニターは11人(52.4%)で、こちらも昨年度とほぼ同様でした。子どもの変化(発達)は短時間で捉えきれものではありません。効果の評価については、5年、10年という長期的・継続的な調査が必要ですし、客観的に効果进行评估するための指標づくりも必要でしょう。

(3) 「わいわい文庫」採録作品については、昨年度と同じく、多くの希望が寄せられています。幅広い年齢層や読書興味に応えられる多種多様な作品の製作が求められます。

さらなる利用の促進に向けて

以上の現状と課題をふまえつつ、マルチメディアDAISY図書「わいわい文庫」の利用を促進するためには、次のような取り組みが期待されます。

(1) 認知度を向上する取り組み

(2) 利用事例を紹介する取り組み

利用を促すためには、まずは、教職員や保護者にマルチメディアDAISY図書について知ってもらうことが欠かせません。アンケート調査の結果からも明らかなように、担当者が入れ替わったりするだけで認知度は低下してしまいます。また、すでにマルチメディアDAISY図書を知っている人や利用している人のさらなる利用を促すために、利用事例などを積極的に紹介し、知ってもらうことが大切です。

認知度の向上や利用事例の紹介には、講演会や講座、研修などを教育委員会や大学などと協同しながら継続的に実施していくことが有効でしょう。

伊藤忠記念財団では、すでに「読書バリアフリー研究会」という講座を実施していますが、可能な限り、実施回数や開催場所の拡大が期待されます。同時に、昨年度から発行している本冊子や伊藤忠記念財団ウェブサイトでの情報発信の一層の充実も期待されます。

(3) 調査・研究の取り組み

マルチメディアDAISY図書に関する調査・研究が教育学、心理学、福祉学、出版学、図書館情報学、情報工学など関係する各方面から盛んになることが期待されます。そのためには、上記(1)(2)の取り組みは、対研究者にも欠かせません。とりわけ、利用の促進

という観点からは、マルチメディアDAISY図書利用の効果についての調査・研究の活性化が重要です。

(4) 多種多様な作品を製作する取り組み

学校の授業での利用から個人の学習や読書での利用にいたるまでの多様な利用場面や、乳幼児から青年・成人までの幅広い年齢層の読書興味に応える作品の増加が期待されます。そのことが、さらなる利用の促進につながっていくからです。

もちろん、このことは「わいわい文庫」だけではなく、すでにマルチメディ

アDAISY図書の製作に取り組んでいる他の団体や出版界全体にもいえることです。マルチメディアDAISY図書以外にも、さまざまな形式の電子書籍が普及しつつありますが、アクセシビリティ機能（文字の拡大や音声読み上げなど）の面では、マルチメディアDAISY図書に現時点で勝るものはありません。こうした点からも、マルチメディアDAISY図書普及の意義は大きいといえます。

最後に、伊藤忠記念財団には、「わいわい文庫」事業の一層の推進と発展を期待しています。

